

令和4(2022)年 No.1252

9月1日

広報 **いせはら**

Public Relations Paper

# ISEHARA

主な記事

- 2 パブリックコメントにご意見を
- 4 5 ともに、このまちで
- 8 地震災害への備えを確認しましょう



## 勝利をつかむ、ゴールへの執念

### スポーツを通じた異文化交流

4年に一度、国際サッカー連盟(FIFA)が主催するナショナルチームによる世界選手権「ワールドカップ」。昭和5(1930)年からウルグアイで始まり、11月には22回目の大会がカタールで開催されます。この世界最高峰の舞台で優勝した国は、これまでに8カ国しかありません。その中でも世界的な名選手を輩出し続けている国の一つがアルゼンチンです。

アルゼンチン国内において、サッカーが果たす役割は大きなものです。幼い頃からボールを蹴り合っているほか、普段はスタジアムに行かないサポーターもテレビやラジオなどで観戦し、翌日になると家族や友人、同僚と試合結果について語り合い、交流を深めています。

今回はそうした国民的競技を通じて、母国の魅力を伊勢原の子どもたちに伝える活動をしている人を紹介します◇4・5面では、各国の生活スタイルや文化の違いを理解しながら、ともにいきる社会を目指す「多文化共生」について掲載しています

#### サッカーを通じてアルゼンチン人の考え方を伝えています

ブエノスアイレス出身で国内のプロチームに所属していました。引退後、日本人との結婚を機に来日し、小・中学校のユースリーグや高校の部活動で臨時コーチをしていましたが、独立するため日本サッカー協会のライセンスを取得して、クラブを設立しました。

平成12(2000)年からは3歳～小学生を対象として、月曜日に高部屋小学校のグラウンド、水曜日に大田すこやかスポーツ広場を借りて指導しているほか、例年9月にはアルゼンチン大使館の職員を招いて競技大会を開催しています。

また、食文化にも触れてもらうため、年に2回程度バーベキューを行い、郷土料理「アサード」や南米風ソーセージ「チョリソー」を振る舞っています。

#### 世界のトップアスリートとの違いは、決定機を逃さないメンタル

日本のサッカー少年・少女のレベルは高く、強豪国と比べても遜色ありません。しかし、年齢が上がるにつれてその差は開いていくように感じています。

体格の違いもありますが、近年はその差も徐々に縮まっており、日本人が得意とするパス回しの精度があれば対等に渡り合うことができます。

大きな理由として考えているのが「決定力」です。パスやドリブル、シュートなど基本的な動作を忠実にしながらも、最終的には少ないチャンスをものにしようとする強い心を養うことが大事です。「ここぞという場面で確実に決めきる」自信をつけるため、ゴールに向かうイメージを常にもつことが必要です。これはスポーツ分野に限らず、社会を生きる上でも通用することだと思います。

アルゼンチンフットボールクラブ  
ピセンテ ブリト監督  
(62歳)



子どもたちを見守るピセンテさん(写真奥。大田すこやかスポーツ広場にて)